





昭和三十八年十二月十二日 第一刷發行  
昭和四十六年九月六日 第二刷發行

荷風全集第八卷  
定價八百五十圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號  
株式會社 岩 波 書 店

目 次

目 次

|          |    |
|----------|----|
| ちぐらし髪    | 一  |
| かし間の女    | 三七 |
| カツフェー一タ話 | 一二 |
| 夜の車      | 一五 |
| かたおもひ    | 一四 |
| 榎物語      | 一六 |
| 夢        | 一七 |
| あぢさゐ     | 二〇 |
| つゆのあとさき  | 二三 |
| 後 記      | 三五 |

ち  
ぐ  
ら  
し  
髪



上の巻

「ぢや、お先へ失禮します。」と仲田は帽子を片手に、社長の自動車から雨の降つてゐる路傍に下り立つた。近頃取りひろげられた麻布谷町通のとある横町の角である。秋雨は今朝から一日降りつづいてゐるので、人通りは宵の中から途絶えてゐるのみか、街のうしろの崖地から横町の溝へ落込む雨水が、谷川のやうな響を立てゝゐるので、夜は一しほさびしく深けわたつたやうに思はれた。

車の内なる社長は帽子もとらず、笑顔をつくつて、仲田を見送る間もなく、その自動車は六本木の坂を上りかけた。仲田ははじめて雨のまだ歇んでゐないのに心づいたらしく傘をひろげ、水音のする眞暗な細い横町へまがると、兩側ともに同じやうな潜門の貸家つゞき。その七八軒目の二階づくりが仲田の借りてゐる家で、門の柱に仲田韓としてある。十年前、今勤めてゐる會社に入つて、新宿から引越して來た時には、壁土のまだ乾ききらない新築の家であつたが、去年の大地震から雨漏がするやうになつた。貸家が古くなつたと同じやうに、仲田はその身も年をとつて酒量もめつさり減つてしまひ、現に今夜の如きはいつも程飲みもしなかつたのに、どうして斯ういつまでも酔つ

てゐるのだらうと、溝際どろぎはの石につまづき危く轉びさうになつて、仲田はわが貸家の門につかまつた。其力にゆずられて潜戸につけた鈴があかない先にチリン／＼と鳴りひびくと、それを聞付けて、格子口には妻のお京が早くも障子をあけて出迎へた。年は四十五六。教員や勤人の家によく見受けるやうな色香の失せた醜い女である。

主人あるじが酔つて歸るのは二十年來めづらしいことではないので、お京は別に氣にも留めないらしく、仲田も亦更に憚る様子もなく、酒臭いおくびをしながら、雨に濡れた薄地の二重廻をぬいで、「あつて茶を貰ひたいな。」とそのまゝ二階へ上つた。

夜具が敷いてあるので、仲田はすぐに寢衣ねまきにきかへ、地震で龜裂ひびの入つた床の間の壁を眺めながら、ぼんやり茶の來るのを待つてゐると、今方手づから掛金かきかねをかけた家の潜門を叩く音がして、聽て入口の格子戸を出入する聲音が聞えた。机の上の時計を見ると一時半である。

「恭太郎ぢやないか。」と仲田は湯呑を盆に載せて上つて來た老妻に問ひかけた。

「えゝ。さうで御在ます。」

「この頃は毎晩おそく歸つてくるやうだな。」

「さう毎晩といふわけでも御在ません。おそくなる時は芝居へ行くのだと言つて居ります。」

「芝居だけで濟んでくれゝばいいが、そろ／＼道樂をしはじめたにちがひないよ。小遣は毎月ど

のくらゐつかふね。」

「あなたが十圓とおきめになりましたから、それだけやります。」

「それは去年まだ地震のずつと前のはなしだらう。今でもそれで何とも言はないかね。」

「はい別に何とも申しません。却て先の中の方が時々ねだつて困りましたが、此節の方が却てよくなりました。」

「それは妙だ。お京。この間からお前にきかうと思つてゐたんだが、恭太郎の持つてゐる腕時計はおれのやつた古いのとは違つてゐるやうだが……。」

「まあさうで御在ますか。つい氣がつかずに居りました。」

「相變らずぼんくらでいかなア。政子はどうだ。夜ひとりで出歩くやうなことはなからうな。」

「まだあなた。十六で御在ますもの。」

「十六だから油斷はならんといふのだよ。お前なぞの若い時分とはまるで世の中がちがふのだからな。氣をつけなくツちやいけない。」

「はい。」

「變な手紙なぞくるやうな事はなからうな。」

「それは大丈夫でございます。」

「さうか。」と仲田は湯呑の茶を飲干して夜具の中へ身をよこたへた。そして老妻お京が戸締りや何かして、再び二階へ上つてきた時には、早や前後知らず大きな鼾をかいてゐたが、酒飲のくせとして、酔のさめきつてしまふ頃ふいと眼をさました。雨は歇んだと見えて點滴の音は絶え、外には蟋蟀こはせきの聲、内には時計の音が俄に耳立つて聞える。仲田はぬつと起上つて、家内のものゝ睡眠ねむりを妨げぬやう、足音をしのばせて厠へ行きかけた。厠は縁側のはづれにあるので、梯子を下りてからまづ娘政子の寝てゐる六疊の間と、恭太郎の部屋にしてある八疊の間とを通り越さなければならぬ。靜に六疊の間の襖をあけると、白粉と寢汗の匂がふんと鼻を撲ち、消し忘れた電燈の光煌々たる下に、娘政子は搔卷を蹴飛ばし枕をはづし、雜誌やら新聞紙やら小説本やら、脱ぎすてた着物やら、無茶苦茶に取りちらした中にシュミーズ一つで、ふんぞりかへつて寝てゐる。仲田は寢相のわるい娘の様子をば今夜初て目撃したわけではない。然しこれまでは別に氣にも留めず、あたりに散亂してゐる着物や雜誌と同じやうに、そつと跨いで通り越してしまふのであつたが、此夜にかぎつて仲田はあけかけた襖の外からヂツと目を据ゑた。

それには理由わけがある。仲田は其の勤めてゐる會社の社長熊谷といふものに誘はれて、この日の夜築地の或待合へ行き、顔立ばかりか物言まで、娘の政子によく似てゐる女を見たからである。しかもその女は藝者ではない。事實はわからぬが、極く内々で待合へ出入をする商店の賣子だといふこ

とで。その夜は桃色の洋服をきてゐたが、其地色や形までが是亦娘政子の洋服とそっくり同じものであつた。熊谷社長はいつもかういふ物ずきな遊びをする時には、必仲田を合棒に誘ふのである。

熊谷と仲田との間柄は今ではどうやら主従のやうになつてゐるが、本は同じ私立大學の同級生であつた。仲田は學生時代から文才のあつたのを恃んで、卒業後新聞社に入つたが、忽理想と現實の相違に失望し、尋で女學校の教員になつてゐる中、女の生徒に戯れて解雇せられ、其後は保險會社だの通信社だの土地會社だのいろ／＼な處に雇はれて、纔に一家の口を飼してゐたが、或日職務上のことで、熊谷の邸宅へ出向いて主人に面會すると、何ぞ圖らん昔の友達であつた。熊谷はもと／＼富豪の家に生れ現在の會社を一人で切廻してゐる敏腕家なので、腹心の部下をふやすつもりでもあるか、舊友の仲田を貧窶の淵から救上げて生活の安定を得させた。仲田は十年この方熊谷社長の秘書をつとめ、今では株券や公債もすこしは持つてゐるやうになつたので、今年既に五十三歳とおのれの年齢を數へても、さして老先の心配もない。廿三になる忝の恭太郎が來年は早稻田大學を卒業しやうといふのに、ルバシカを着て文學熱に浮かされてゐるのを見ても、唯仕樣のない腔かじりだとはかり。娘の政子に執拗<sup>しふお</sup>くねだられては遂に女洋服を買つてやるやうな餘裕もできたわけである。かうなると仲田が現在の生涯には猶この上の蓄財と酒色の楽しみとの外には何物もないことになる。然しこれが即<sup>すなはち</sup>普通人の一生涯だと考へて、仲田は別に悲しむでもなかつた。

廁を出て再び二階へ上り電燈を消して寢床に入つたが、酔のさめてしまつた後はなか／＼寢つかれない。洋装をして築地の待合へ來た怪し氣な賣春婦の姿と、シユミーズ一枚になつた娘の寢姿とが、いよ／＼混同して眼の中を去らない。兎角する中、突然仲田は二十年前女學校の教師をしてゐた時、女の生徒ととんでもない間違をしだしたことを想起した。娘はまだ生れず、悴の恭太郎が母の乳を吞んでゐた頃のことである。

相手の生徒は複雑な境遇の女であつた。後になつて知つた事であるが、その母は烏森邊に待合をしてゐたので、それでは家庭不良といふことから當時の校則として娘の入學は許可せられないので、叔父何某なにじの名義で届書が出してあつた。然るにその叔父といふのは實は金を出して娘を圍者にしてゐる旦那であつた事を仲田は偶然窺知つたのである。仲田は暑中休暇の或一日亡父の法事方々かたぐ郷里の沼津へ歸つた時、土地の心やすい旅館の主人あるしを訪ひ、勧められるがまゝに一晚とまると、隣座敷にわかい女をつれた客がゐて、甚しく仲田の睡眠ねむりを妨げた。仲田はその時三十を越したばかりなので、實はこなたから勝手に耳を聳てゝひとりでやきもきして寢なかつたのである。

客は商人とも見えるでつぷりした五十年配の禿頭で、それをば更にいやがる様子もなく、その爲すがまゝになつてゐるのは誰あらう松田綱子と名乗つて女學校へ通つてゐる其生徒に相違ない。髪は丸鬚に結ひかへてはゐるが、仲田はどうしてもその人にちがひないと見定めた時には、あまりに

事の意外なのに呆れ果て翌日の朝はこなたから却て顔を合さぬやうにと氣をもんだ位であつた。然し旅館を出て東京に歸ると、他の事にまぎれて奇怪な其夜の光景も日と共に忘れられてしまつたが、九月に入つて暑中休暇も早や二三日で盡きやうといふ残暑のはげしい或日の午後、市ヶ谷見附外の堀端で電車を待つてゐた時、仲田は偶然同じ停留場に立つてゐた綱子の姿を見て忽ち當夜のことを思返した。沼津の旅館では大きな丸髻に赤い手柄をかけてゐたのを、今はいつも教場で見るとやうな廂髪にして、袖の長い中形縮の浴衣に海老茶の袴を胸高にはいてゐた。日傘をつぼめて少しはにかむやうに顔をしかめ、叮嚀に挨拶をする綱子の顔を、仲田は覺えず穴のあくほど見つめた。仲田は教員になる前新聞社にゐたので、所謂社會の暗黒面には通じてゐる。鈴のついたボツクリをはいた雛妓が公然酒亭に春を鬻ぐことをも更にめづらしいとはしてゐなかつたが、此の海老茶袴をはいた女學生があゝの相場師のやうな赭顔の老人と旅館に泊つてゐたかと思ふと、實に不思議でならない。仲田は綱子が果して當夜の女であつたか否かを確かめやうと、まづ第一に目の色と目の縁とそれから咽喉や頸筋の皮膚の色に注意し、また身體中の肉付を浴衣の上から見透さうと思つた。

電車はなか／＼來さうもない。日は赫々と照りつける。綱子はどうかやら仲田の目つきに氣まづくなつたらしく、だまつてゐてもわるいと思つたのか少し顔を根めながら、「先生、電車はどうしたんで御在ませう。」

「もう來さうなもんですな。」と仲田は卷煙草を取出して、「松田さんこの休にはどこか旅行しましたか。」

「いゝえ何處へもまゐりませんでした。」

「さうですか。」

「まだお暑うございますわねえ。ですけれどわたくし學校の始るのがほんとうに待遠しうございます。」

仲田は突然、「あなた沼津へ行きましたらう。」

すると綱子は顔色をかへながらも「いゝえ。」と聲を顫せて首を振つた。

初め仲田はそらくしい綱子の言葉の面憎くさにちよつとからかつて見たのであるが、俄にまた氣の毒になつて、「誰にも言やしません。心配しないでもいゝです。誰にも言やしません。」

その時陸軍士官學校の門から騎兵の一隊がまつしぐらに見附の方へと、馬を驅つて來るので、仲田は何心なく綱子の手を取つて俱に道をよけやうとすると、綱子は眼を閉ぢいつの間にか唇の色まで變へてゐるのにびつくりして、「どうしました。松田さん、しつかりおしなさい。」

今にも其場に倒れさうな綱子を扶けて、仲田はやつと向側なる半僧坊の門際もんざいまでつれて行つた。綱子は日傘を杖に敷石の上にしゃがんで袂で顔をおほひながら、「ぢきに直ります。日向に立つて

ゐたものですから。」

「水でも飲んだらどうです。待つておいでなさい。」

仲田はあたりを見廻した。石をしいた狭い道の突當には寺の境内へ登る石段があつて、兩側には貸家らしい二階家が建込んでゐる。その中の一軒に下宿屋の札のかけられてあるのを目にした時、仲田は初てその下宿屋の主婦<sup>おかみ</sup>とは曾て、新聞記者をしてゐる頃友達がとまつてゐたので、顔を見知つてゐたことを思出すや否や、急いで駆け込み、やがて四十前後の主婦らしい女と二人して、綱子を下宿の空間へかつぎ入れた。綱子は腦貧血を起したので、呼びにやつた近所の醫者の來るのを待たず、やがてもとの血色になつた。と見るや否や、仲田はすぐに綱子の手を把り、介抱してやつた親切やら又其秘密を握つてゐる事やらを種にして、宥<sup>なだ</sup>めたりすかしたり脅したりして、どうやら綱子を得心させた。幸にもこの下宿屋は重に勤人を客にしてゐるので、晝中はしんとして人氣なく、半僧坊の境内に鳴きしきる秋蟬の聲と市ヶ谷八幡の木立にむれさわぐ鴉の聲との聞えるばかりなのに、仲田はその後つゞいて二三度、綱子をつれて來たが、する中突然校長から辭職の勸告を受けた。それと共に綱子も學校へは來なくなつた。

月日のたつにつれて、仲田は生涯の一奇譚として當時のことを思返す時、丁度その頃評判であつた魔風戀風といふ新聞小説の插繪を併せて思ひ浮べる。女學生が袴をはいて自轉車に乗つてゐる圖

である。女學生の海老茶袴が當時の人目を惹いたのは、恰も二十年後の今日洋裝する婦女子の中稍容貌の醜からざるものが何やらわけもなく男の目につくのと同じであつた。その頃海老茶袴は禮儀作法のみならず、年頃の女にはいろ／＼よくない譯があると論ずるものもあつた。是亦今日女子の洋服は胸と腕とを衆人の面前に露出するのみか、靴足袋の編目から脚の皮膚をも透して見せるので、女子が羞恥の心を失はしむるものだといふ説と相似てゐる。

仲田はこゝに至つて再び築地の待合で見た賣笑婦の洋裝姿を、闇の中に描出した時、隣の庭に飼はれた雞の聲がして、次の間に寝てゐる老妻お京の寢返りでもするらしい物音に、仲田は搔卷をかぶつて力めて睡についた。

## 中の巻

山の手線の停車場に近く、地名は府下何々郡何々村の次には勿論大字何々がつき、番地は何千何百何十と一度や二度では聞いても覚えられず、道をたづねて行けば猶更知れにくい横道。賣れ残つた草茫々たる空地あきちの隅々、或は既に廣大な屋敷になつた板塀外の地尻なんぞに、五六軒づゝチラバラと建てられたペンキ塗の新しい貸家の中には、赤い瓦で葺いたのも見えて、外見みかけはいづれも窓から戸口に至るまで、すつかり西洋風なるには似ず、内へ入れば羂末な障子唐紙に、疊が敷いてある。

さういふ貸家の八疊の間に、夫婦とも思はれるが、年頃はさしてちがひもせぬらしい何れも三十四五。本箱の上の時計はもう午後一時を過ぎてゐるが、二人ともまだ寝衣ねまきのまゝで、但し男はうしろへ搔上げた頭髮かみのけばかりてらく／＼ひからせ、女は上塗の白粉どす／＼、今方午餉をすましたらしいチャブ臺に肘をつき合せ、砂糖のついたカステラ風の菓子かしを袋の中からつかみ出して、むしや／＼頬張りながらの雑談。

「百合さん、いつたいあの二人はいつラブに落ちたんだらう。チャンスは地震の時かねえ。」

「えゝさうなんですつて。交際はもつと前からあつたんだけど、さうなつたのは地震の晩仲田さんが綱子さんを救けに行つて、それから二人で野宿した時なんですつて。」

「さうか。ぢや仲田は地震の晩から女といふものを知つたんだね。彼に取つて地震は記念すべき事件だな。」

「ねえ、あなた。仲田さんはほんとにそれまで童貞だつたか知ら。あなた、さう思ふこと……………」

「僕はさう思ふよ。仲田が初めて紹介狀を持つて、僕のところへ來た時は、まだ二十か二十一だつたからね。その時にはたしかに何も知らなかつたらしいよ。」

「ぢや矢張綱子さんの方から誘惑したんだわね。どういふ風にして教へたんだらう。」

「綱子さんはお前とはおない年ぢやないのか。」